

**歴史地理 先史・古代** 本年の歴史地理学分野とりわけ先史・古代に関する業績は、きわめて豊富なものとなった。まず歴史地理全般を扱ったものとして、谷岡武雄『歴史地理学』(古今書院)・菊地利夫「行動歴史地理学の論理と歴史心理」(筑波大歴史人類7)・小林健太郎「歴史地理学の課題と展望」(地理24-1)をあげうる。谷岡の応用地理学的色彩も強い著作はその広い視野とも相まって高く評価するべきものであり、また菊地・小林によっては歴史地理の原点を再検討する必要性が説かれた。また千田稔「古代空間の構造」(奈良女子大地理学研究報告1)は記号論の導入によって、古代に限らず、歴史地理全体にわたる新しい地平を切り拓いたものとして注目される。服部昌之の‘Historical Geography in Japan’(*The Professional Geographer* 31-3)は簡潔な展望である。

先史・古代の自然環境については、海津正倫「更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程」(地評52-4)・高橋学「先史・古代における雲出川下流域平野の地形環境」(人地31-2)・山室祝子「岡山平野における弥生遺跡の立地について」(人地31-5)・日下雅義「地形環境と復原」(歴地会報103)・古谷正和「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」(第四紀研究18-3)・宮城豊彦他「仙台周辺の丘陵斜面の削剝過程と完新世の環境変化」(同)・松島義章他「糸魚川—静岡構造線の活動によ

て変位した諏訪湖南東岸の縄文住居址」(同)・井関弘太郎「自然堤防の形成について」(名古屋大地理学研究報告1)・高木勇夫「沖積平野の地形面分類に関する整理と検討」(日本大文学部自然科学研究所研究紀要14)・鈴木秀夫‘3500 Years ago—Climatic Changes and Ancient Civilizations’(*Bulletin of the Department of Geography, Univ. of Tokyo*, 11)・後閑文之助「日本の古代より近世に至る地質学と関連学の発達史」(地学雑誌88-2)等々の業績がえられた。その各々について紹介する余裕は本稿では到底望めないが、いずれも新知見に富んだ力作である。また『考古学ジャーナル』の「火山堆積物と遺跡」(157)・「古墳の年代」(164)・「旧石器の諸問題」(167)・「縄文文化の諸問題」(170)の各特集もきわめて便利なもの。

古墳時代については、櫃本誠一「前方後円墳の企画について」(ヒストリア84)・中井正弘「百舌鳥古墳群の分布をめぐる資料について」(同82)・梶国男「コンピュータを使った前方後円墳の類似度研究を読んで」(考古学研究26-1)など考古学者による研究が、歴史地理に関連するものとしてあげうる。小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」(考古学研究25-4)も歴史地理にとって大いに参考となる。さらに各地で発掘報告書が続々と刊行されたがその各々については省略したい。

古代に眼を転ずる。まず藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅳ』(大明堂)による本シリーズの完結を特筆したい。この巻は西海道を主体にしたものであるが文献一覧・付図も貴重なものであり、先のⅠ～Ⅲとあわせて国府などの諸施設と道路を総合的に復原考察したものとして高く評価される。交通路に関しては他にも餌香市などを結節点としてみた藤岡謙二郎「古代の三市とその交通地理的位置」(櫃原考古学研究所論集5), 西海道・南海道の駅路を扱った日野尚志

「駅路考」(九州文化史研究所紀要24)、古代山城と官道を論じた鶴嶋俊彦「古代肥後国の交通路についての考察」(駒沢大大学院地理学研究9)などが注目されるし、吉本昌弘「摂津国有馬郡を通る計画古道と条里」(歴史会報104)・金坂清則「今庄の地域的変容」(福井大教育学部紀要29)などもえられた。

例年のように本年も条里に関する研究は多いが、とりわけ弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』(東京堂出版)はあくまでも客観的に対象地域の条里を述べた末ながく残る業績であり、類書の刊行が望まれる。またここ10数年来、主に西海道について精力的な調査を公表している日野尚志「筑後国上妻・下妻・山門・三毛四郡における条里について」(佐賀大教育学部研究論文集26, 1978)・「筑後国御井(筑後川左岸)・三潴二郡の条里について」(同27)をはじめ降幡由紀子「信濃における地形と条里」(人地31-6)・山川恵弘「相川流域の方格地割」(岐阜地理18)なども得られた。圃場整備事業等で条里潰廃のめだつ現在、条里研究の多いことは慶賀すべきことではあるが、大縮尺な舞台での研究の進展の必要性などが痛感される。

次に荘園村落を主軸にすえたものも多い。片平博文「大和国乙木荘における荘園村落の発達過程」(地評53-1)・金田章裕「平安初期における嵯峨野の開発と条里プラン」(追手門学院大文学部紀要12, 1978)などで、両論文とも十二分に精密なものである。しかし、類似の研究はいわゆる歴史学畑の研究者によってもなされてきた。たとえば中野栄夫による『律令制社会解体過程の研究』(塙書房)をはじめとして服部英雄「肥前国長嶋庄の開発主体」(史学雑誌88-6)・安田次郎「興福寺大乘院領大和国横田庄の均等名」(同88-1)などはかつていわゆる歴史地理の占有物であった手法を存分に駆使したものである。この点、単純に歴史地理の他分野に対する影響と喜んでいいものかどうか。ある意味では、歴

史地理研究者は危機感をもって然るべきかもしれない。

他のテーマについてもバラエティに富んだ業績が公表された。原秀禎「古代の『古市大溝』に関する地理学的研究」(人地31-1)は花粉分析によって大溝の復原に迫ったもの、樽松静江「朝鮮式山城の高安城に関する軍事地理学的研究」(奈良女子大地理学研究報告1)は高安城を中心として奈良盆地の要塞化と古代山城の配置を論じたもの、近藤滋「大津宮の規模と構造について」(日本史研究200)は1尺35cmによる400尺地割を提示したもの、坂田泉「古代東北地方の城柵相互間にみられる位置の関係」(東北文化研究所10)は全国の山城と城柵や国府の位置を検討した意欲的なもの、足利健亮「豊前国京都の宮」(地理24-12)は地名から神籠石・宮を考えたもの、加藤瑛二「陶業地名と陶業地域の資源利用」(名城大教職課程部紀要, 1978)は愛知・滋賀両県の当該地方と遺跡を精細に考察したもの、高橋正「古地図の方位について」(古地図研究10-7)は東大寺開田図の方位を検討したもの、桑原公徳「地籍図と地名」(地理24-11)は各時代・各地の具体例をもって地名と地割を紹介したもの、井上薫「都祁の水池と氷室」(ヒストリア85)は都祁之山道や畿内の氷室を考察したもの、等々。『地理』24-3では飛鳥に関する総合的な特集もなされた。藤岡謙二郎『浜田青陵とその時代』(学生社)はわが国の先史・古代学の発展を語るうえで看過しえないもの。さらに『宇治市史5』は史料編ではあるが空中写真と地籍図を収録し解説した類例のないもので高く評価すべきである。また奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『古代地方官衙遺跡関係文献目録Ⅰ・Ⅱ』は1901年1月から1978年12月までの関係文献を地方や遺跡種類ごとに網羅したもので利用価値が高い。

以上、わが国の先史・古代に関する主要なもののみをピックアップしただけで、このように

文献網羅的になるほど、本年は数多くの業績の  
得られた年であった。 (高橋 誠一)